

がん放射線療法看護認定看護師教育課程修了報告

(地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院 看護部 7D 病棟)

中川 紀直

要 旨

がん患者が治療を継続していく中で、自分らしく生きていける支えになりたいと思い、福岡県久留米市にある久留米大学認定看護師教育センターで、がん放射線療法看護認定看護師課程を受講した。有害事象に対して予測した予防対処を実践し、患者に寄り添った支援をしていく必要性について学んだ。セルフケアを確立し意思決定を支えていくことが自身の役割であると認識することができた。患者の生活に合わせたケアの実践、多職種との連携の強化、病棟・外来・地域にわたる継続的な看護を行い、地域がん診療連携拠点病院の役割を担っていくことを今後の課題としたい。
(京市病紀 2021; 41: 100-103)

Key words : がん放射線療法看護認定看護師課程

はじめに

厚生労働省の第3期がん対策推進基本計画の中に「がん医療の充実」があり、その中でがん治療は手術療法、放射線療法、化学療法、免疫療法の記載がある。がん治療は単独で行うのではなく集学的治療が必要とされている。本院は2007年に地域がん診療連携拠点病院に指定され、地域のがん医療の拠点としての役割を担っている。2017年度に当院で放射線療法を受けた新規患者は403名、2018年度は415名、2019年度は409名であった。患者にとって放射線療法は、就労を継続しながらできる治療の一つであり、当院の放射線治療室でも就労支援の一環として、照射時間枠を延長し就労と治療を両立できる取り組みを行なっている。低侵襲でがん治療をすることができるため患者の負担が少なく、身体機能を概ね維持できることは放射線治療の大きなメリットである。しかし副作用として皮膚トラブルや嚥下障害などの有害事象が出現する可能性がある。出現部位によっては、日頃の生活を有害事象に合わせて変更しなければならないことがある。患者自身が有害事象に対するセルフケアを実践し、日常生活に取り入れることで、生活の質を落とすことなく過ごすことができる。看護師は患者に放射線治療の情報提供を正確に提供し、有害事象を予測し対処方法を知ってもらうことで、患者は安心して治療を受けられるのではないかと考えた。放射線治療を正しく理解し、治療期間に起こる事象に対し一緒に考え、患者に寄り添い治療を支える役割を担いたいと思うようになった。

また、男性患者より手術後の性生活や治療後の妊孕性などセクシャリティーな問題の相談を多く受けることがあり、実際に患者からの声を聞くことで、身体的だけでなく精神的にも負担があると改めて感じた。治療部位によっては、治療後の性生活が制限される場合がある。セクシャリティーの問題は、治療前から理解度を確認しながら関わる必要がある。がん看護分野の認定看護師として、放射線療法を受ける患者だけでなく、がん患者が治療を継続し、自分らしく生きていくための支えになりたいと思い、がん放射線療法看護認定看護師を目指した。

今回は、福岡県久留米市にある久留米大学認定看護師教育センターで行われたがん放射線療法看護認定看護師課程を受講し、がん患者の治療にはセルフケアの獲得が必要であると学んだので報告する。

教育課程の研修期間

2019年6月1日～2019年11月31日

がん放射線療法看護認定看護師の教育目的

1. がん放射線療法を受ける患者と家族のQOL向上に向けて、水準の高い看護実践ができる看護職者を育成する。
2. がん放射線療法を受ける患者の看護において、看護実践を通して他の看護者に対して指導ができる能力を育成する。
3. がん放射線療法を受ける患者の看護において、看護実践を通して他の看護者に対して相談・対応・支援ができる能力を育成する。

がん放射線療法看護認定看護師課程での学び

当初は放射線治療による有害事象のセルフケアについて根拠のある説明をすることにより、患者は不安なく放射線療法が受けられるのではないかと考えていたが、認定看護師教育課程研修を受け、治療を行なっていく中で必ず出現する有害事象に対して予測した予防対処を実践し、患者に寄り添った支援をしていくことの必要性を理解した。照射範囲や照射方法・処方線量を考慮し個々の患者に対し、予測的な介入が必要で、照射部位による有害事象の予防・対処方法の実践と指導が、治療後のQOL向上につながる。患者の価値観を尊重し治療後のライフスタイルを患者や患者を支える家族とともに考え、主体的に治療が受けられる援助について考える機会となった。がん患者は、治療選択だけではなく説明や指導に対しても意思決定を繰り返している。その思いを、共感の姿

勢を持って受け止め、患者の生活にどのように取り入れていくかを一緒に考え、セルフケアを確立し意思決定を支えていくことが自身の役割であると認識することができた。

1) 共通科目

共通科目では臨床病態生理学・フィジカルアセスメント・臨床薬理学といった基礎知識を学んだ。がん看護に特化したアセスメントにつながる知識が得られた。臨床のエビデンスを元に、多角的なアセスメントを通して患者を捉えることが必要である。

認定看護師の役割である指導・相談では化学療法分野と合同で演習を行い、化学療法の観点からみた患者の捉え方などについてディスカッションすることでより深く患者像を理解でき、多職種で患者と関わることの必要性を学んだ。また、「聞く」という行為も認定看護師として必要な関わりの一つである。例えば、患者の「いつから髪の毛が生えますか」という質問に、看護師はウィッグの紹介など行うことがあるが、実際は髪の毛が生え揃う時期に合わせて仕事の再開を検討されているのであった。日頃、患者の話を遮ってしまったり、きっと患者はこうだろうという思い込みの援助をしていることがあることに気付いた。この事例では、患者の話を聞くことで、就労支援の紹介などが患者の意向に沿った支援につながり、治療を安心して受けることができる関わりであった。

倫理については緩和ケア分野も参加し教育課程の他分野合同での演習を行なった。Jonsen らの4分割法を用いて患者理解を行った。「自律尊重の原則と善行・無害の原則、自律尊重の原則と公正・正義」の各原則を守るためのメリット・デメリットについて検討を行った。がん看護を行っていく上でも倫理的な問題も多く患者像を捉える上でとても重要になる。がんの告知は死を連想させるとして、家族の強い希望により未告知を希望される場合がある。近年はがん治療の進歩や情報の普及により病状の把握が容易にできる。患者の権利意識を尊重し関わる必要がある。認定看護師として、高い倫理観を持ち患者と患者を支える家族の声を聞き関わるのが重要である。

2) 専門科目

専門科目では、腫瘍概論・放射線物理、治療計画など放射線の専門的な知識を学んだ。専門基礎科目では、大分県立大学看護科学大学にて線源を用いて鉛やアクリル板で放射線遮蔽の実験を行った。放射線防護についての学びを深めた。医療における放射線は治療だけではなく診断に面においても担っている。患者だけでなく放射線を扱う医療者も医療被曝の危険性は十分にある。放射線被曝予防の三原則を実行し、いかに医療被曝を低減できるかを理解できる演習であった(図1)。

放射線治療に伴う有害事象のケアについては、専門的アセスメントし作用機序を元に対応方法などディスカッションで知識を深めた。治療計画については実際に治療

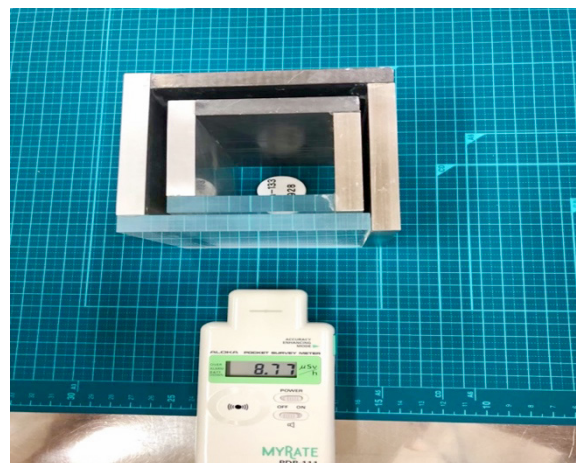


図1



図2

計画から照射される臓器や危険臓器を割り出し、処方線量から今後出現する可能性がある有害事象についても理解が得られた。臨床の場では個々の治療計画の内容を十分に理解しケアに繋げる必要がある。実際に治療台に臥床し患者体験を行うことで、治療中に感じる恐怖感や圧迫感を体験し、治療前のオリエンテーションでもより現実的に伝えていけると感じた(図2)。

重粒子線治療施設の見学実習として、九州国際重粒子線がん治療センターでは、最新の施設や治療を見学することができた。治療に来られた患者の状態をアセスメントし、「治療を完遂するためにはどのような支援が必要か」、「安全安楽に治療を受けるにはどのような関わりを行った方がいいのか」など、放射線治療を受ける患者の看護として共通していると感じた。がん放射線法看護認定看護師として偏った視点ではなく、患者が何を求めているのか、そしてどのような情報を提供する必要があるのかを考え、患者にとって適切な情報を伝えられるように最新の情報を常に更新していくことが必要であると考え(図3)。



図3 九州国際重粒子線がん治療センター

3) 臨地実習

臨地実習では「集学的治療の化学放射線療法を受ける患者の看護」、「肝内胆管がんによる左大腿骨転移に緩和照射を受ける患者の看護」の2事例を受けもった。

「集学的治療の化学放射線療法を受ける患者の看護」では、頸部食道がんの患者を担当した。頸部食道がんの照射部位は標的臓器にあり、ガイドラインでは有害事象が強く出現する。実際に担当した患者も、治療を進めていく中で食道狭窄が出現した。患者は、主治医から手術を勧められたものの、食事をこれまで通り摂り続けたいという希望から化学放射線療法を選択された。治療前から腫瘍による食道狭窄あったが食事形態を自身で調節することで摂取できていた。治療が進むにつれて放射線による粘膜浮腫が出現し、固形物の摂取ができなくなった。患者の希望されていた「食事をしたい」という思いを尊重し、経腸栄養剤のエンシュア・リキッドを凍らせて摂取する提案を行った。初めのうちは凍らせたエンシュア・リキッドを好んで摂取されていたが、さらに食道狭窄が増悪し唾液を飲み込むことも時間を要した。栄養状態改善を目的に、入院管理しながら治療を継続することとなった。病棟看護師に患者の治療に対する思いや放射線療法による有害事象について、入院時にカンファレンスを行った。結果的に胃管で注入食を併用しながら治療を完遂できた。患者の治療選択された思いを聞き、寄り添うことで意思決定を肯定し、その関わりが治療意欲を継続することにつながったと考える。

有害事象が日々強くなっていく中で、予測した症状コントロールを行い、身体的苦痛を最小限にすることが重要であると学んだ。

「緩和目的で放射線治療を受ける患者の看護」では、左大腿骨転移に緩和照射を受ける患者を担当した。医療麻薬による疼痛コントロールや外来治療の日常生活の注意点について家族を含め指導を行った。通院治療される際の交通手段と医療用麻薬の投与時間について家族と確認し適切に行えるよう説明した。治療室では放射線技師と車椅子から治療台に乗り移る際の注意点について再確認した。治療前から終了後の日常生活を予測し、社会資源が必要であると判断し、ソーシャルワーカーに介入依頼

し、介護保険の導入を行った。緩和照射途中で手術適応となり術後に緩和照射を再開する方針となった。治療室の看護師に治療後の生活を見据えた援助についてカンファレンスを通して指導を行い継続看護を図った。多職種や他部署との連携を行い介入し支えて行くことの重要性を学んだ。

今回の実習で、患者にとっての意思決定は、治療選択だけでなく経管栄養で治療を継続していくなど日々選択を行っている。その意思決定を支え治療を完遂していくために個々ではなく、チームで患者を支えることの重要性を学んだ。また、治療中の急性期有害事象だけではなく、治療終了後も晩期有害事象が出現する可能性がある。その症状をできる限り軽減するためにも適切なセルフケア獲得が必要であると学んだ。

振り返りと今後の課題

久留米大学認定看護師センターの特徴でもある、がんに特化した3分野が併設されていることにより、本分野だけでなく、化学療法分野・緩和ケア分野の仲間と共に協同し学び振り返ることで広い視野で支援ができると実感した。患者はがん治療の中で、放射線療法だけではなく手術療法や化学療法など患者自身が選択し治療を受けることとなる。治療を継続していく中で起こる問題に対して一人で解決できない場合は、話し合いを行いコンセンサスを得て最善の方策を模索していくことが必要である。

講義や演習・実習では根拠をもとに、ケアの必要性や専門性のある実践を理論付けて行なっていくことが、認定看護師の役割であると学んだ。がん放射線療法看護認定看護師として実際に実践することで実践モデルとしてスタッフと共に指導・実践していきたいと考える。

今後の課題としてまず、自部署の放射線療法を受ける患者のケアの質の向上をあげる。有害事象の出現は、患者の身体的な苦痛だけではなく精神的な苦痛にもつながり、治療完遂にも影響する可能性がある。患者ごとの治療計画を把握し、今後出現する有害事象に対して、予測して関わる必要があると考える。有害事象についてのケア方法の勉強会を実施し、病棟看護師が根拠をもとに有害事象を理解し患者の生活に合わせたケアの方法を実践できるように関わりたい。

二つ目の課題として、意思決定時のインフォームドコンセントの同席をあげる。がん告知は意思決定を行う上で重要な時期である。また、治療変更や再発など治療選択する時の患者の精神的・心理的負担は大きい。患者・患者家族が十分にメリット・デメリットを理解し治療を受けることで、自身で意思決定を行い治療が遂行できると考える。また、認定看護師が同席し、専門的関わりを提供することで、がん治療に伴う副作用の不安や就労の不安などを記録に残し、多職種で連携できるような働きかけを行っていきたい。

最後に、病棟・外来・地域にわたる継続看護をあげる。現在の放射線治療の傾向として、単回照射が多くなって

いている。これは照射期間が短くなり患者は短期の入院で、治療を受けられるメリットがある。しかし、放射線療法に伴う有害事象は、退院後に出現する可能性がある。患者が退院後に自身で有害事象の観察やケアをしていかなければならなくなる。今後の放射線治療の傾向からも退院後のセルフケア支援の確認が重要となる。入院中に行ったセルフケア支援が退院後も適切に実施できているか外来で評価されていない現状ある。外来との連携を行いセルフケアの状況確認と必要時には再指導・調整を行っていき、地域とは看護サマリーを用いて継続するケア方法を情報提供していく仕組みを作りたい。このような関わりを行うことで、治療後のセクシャリティーの問題に対しても相談できる場として活動したいと考える。

おわりに：がん看護とがん放射線療法看護認定看護師の役割について

研修を受講し、工夫次第で、患者はがんサバイバーとしてその人らしい生活が送れると学んだ。そのためには病院だけではなく、患者の生活を取り巻く生活環境との調整が重要だと学んだ。患者の思いを傾聴・共感し、患者と共同して生活を支える実践している姿を見せることが、がん看護に関わる看護師の実践モデルとして人材育成にも繋がると考える。私自身のがん放射線療法看護認定看護師としての自己課題として取り組んでいきたい。

今回、本教育課程において、がん放射線療法看護を学び深める機会を与えていただいたことに感謝いたします。

Abstract

Report on Activities after Completing the Curriculum for Cancer Chemotherapy Nursing for the Certified Nurse

Norinao Nakagawa

Ward 7D, Department of Nursing, Kyoto City Hospital

I enrolled in the Curriculum for Cancer Chemotherapy Nursing at the Education Center for the Certified Nurse in Kurume City, Fukuoka Prefecture in order to obtain further skills to help each patient continue cancer therapy and live life as each wills. I learned the need to practice preventive measures foreseeing the adverse events and to understand the patient's feelings. I was able to recognize my role in establishing the patient's selfcare and supporting the patient's decision-making process. My future project is to provide care according to the patient's lifestyle, strengthen the multidisciplinary cooperation, and improve nursing care in the ward, the out-patient care and regional nursing care as a member of the designated cancer hospital.

(J Kyoto City Hosp 2021; 41:100-103)

Key words: Curriculum for Cancer Chemotherapy Nursing for the Certified Nurse